

「木を植える鮭屋」

青年塾東クラス11期 株式会社アミノ 上野 敏史



東日本大震災直後の事務所

私は東クラス11期生で約7年前に出発させて頂きました。当時の決意表明では、「地元仙台を活性化させる企業を目指す」といった内容の決意表明だったと記憶しております。

現役時代、気仙沼講座で「海は森の恋人」でも有名な畠山重篤の「森が消えれば海は死ぬ」という内容とその根拠に興味はあったものの、水産を扱う企業として具体的に植樹まで落とし込むことはできませんでした。当時は目先の経済性を優先していたように思います。どこか違和感を脳裏に残しながら、数年後忘れもしない東日本大震災が我々の三陸を襲ったのです。

当時は落胆してる暇がなく、まず電気が出なくなってしまった仙台中央卸売市場の冷蔵庫、冷凍庫に眠る食材を

片っ端から買い漁りました。来る日も来る日も。それをがむしゃらに被災地の方々に配り、少し落ち着き、皆様に余裕が出来た頃に販売し、「飲食店として被災地の食だけは守る」という意思を胸に、炊き出し、ボランティア、被災した店舗の復旧、本社移転、震災後僅か半年で上海FC出店と無我夢中で走り続けました。全国の皆様のご協力には本当に感謝しております。

人材が集まる会社

震災から2年、3年と経過する中で中心地は以前の生活を取り戻し、弊社もお陰様で順調に営業を継続出来るまでになりました。しかし、復興の瓦礫除去や放射能汚染処理の仕事、建築関係会社の求

人への人気が集まり、弊社も人材不足という新たな問題に悩まされました。

そんな中、飲食関係の三陸水産企業視察研修があり、弊社も現状把握と地方からの視察者へのアテンドとして十数社の三陸水産企業を訪問する機会がありました。仕入れ担当者からの報告によると、「女川の蒲鉾業者『高政』という老舗の会社への求人申し込みだけが後を絶たない。それ以外は震災前より業績は悪化しています」という報告でした。

震災直後、運良く津波の被害を免れた工場と冷凍原料があったこの会社は、生き残った社員を誰一人解雇しないという

意思と、女川の悲惨な被害を受けた被災地の方々の飢えをしのぐため、工場をフル稼働させ、社員の足で女川の被災地や避難場所へ無償でかまぼこを48日間休まず配り続けていました。当然、無償ですから会社にも社員にもお金は入りません。ただ苦しんでいる方々の空腹だけは回避できました。結果、様々なマスメディアに取り上げられ、地元からの感謝だけでなく、女川という三陸の中でも津波被害が甚大だった地域に、また水産加工という決して華やかではない業種であっても、当時あの決断をした社長の元で働きたいと全国から求人が後を絶たな

いと言うのです。この時、私は気づきました。と同時に胸を締め付けられる想いがありました。

三陸のほとんどの水産工場は復興の助成金を頂き、新築、最新鋭の設備を備える工場へと様変わりしてました。広さも倍以上になり、設備的には再出発の準備は全国の皆様のお陰で整っていました。しかし人が集まりません。当然です。理由はどうであれ一度解雇された社員は二度と戻ってくる気になれません。結果、再稼働できても震災以前の加工量と同等か、それ以下しか生産できない水産企業が増え、震災での直接的な倒産だけでなく、人不足による2次的な倒産が続きました。

「企業は人なり」。正にその通りで女川の「高政」さんは現在も月5名に限定して面接を行い、雇用し、雇用したからには必ず社員を幸せにする！という想いで工場の規模を拡大しているそうです。社員の働き場所を新たに確保するための増築と、震災の影響で周りが見えなくなっていたとしても、助成金を頂き、出資を抑えてできる増築とでは、ついてくる結果に大きな差が出ました。



震災直後の弊社鮭鮓



被災地での炊き出し



被災地ボランティア

私は気づきました。本物の企業はこうあるべきだと。更に賃金への目的を越えた労働意欲を持つ社員を育てること、その社員が会社をより強くするということを。重ねて考え抜いた結果、島山さんの言葉に戻りました。目先だけではなく、根本に地域や業種が抱えている問題を解決出来てこそ、地域に愛される本物の企業になりうる、と。

慌てて島山さんと松永北海道大学名誉教授の「漁師が山に木を植える理由」を読み返し、海と森の関係性について確信が持てました。海の食物連鎖の底辺は植物プランクトン。この植物プランクトンに必要な栄養素を体内に取り込むために必要不可欠なのが鉄（フルボ酸鉄）なのですが、酸素のない腐植土中では鉄イオンとして存在しており、腐植される段階で分解できない有機物（フルボ酸）と土中で結合しない場合、酸化して鉄粒子になります。鉄粒子では生体膜を通過できないので、海に流れても生物は取り込めません。つまり植物、特に葉っぱが腐る時にできるフルボ酸の存在と空気中では酸化してしまう鉄が土中で結合し川をつたって海に流れ、食物プランクトンに摂取されるといふ限られた条件でしか、あ

らゆる海産物の分母である食物プランクトンは成長できないわけです。

様々な説があるようですが、釣り好きな方や漁師さんは直感で理解できます。ただ消費者の方々にこの原理原則をよりわかりやすく知ってもらうためには、三陸の多くの皆様に育てて頂き、ある一定の広告宣伝能力がある弊社が会社をあげて植樹することで、その意味を知ってもらえる機会になると考え、実践することに決めました。

社をあげて植樹祭に取り組み

そこで、まず「森を育てる家具屋」「木を植える家具屋」としても精力的に植樹運動されている青年塾の東クラス元塾頭の渋谷氏にメールさせて頂き、仙台の輪王寺、日置住職をご紹介頂きお話を伺いました。この輪王寺では支えとなる近辺の山のトンネル開通工事のため伐採された木々と山の再興を目的として、十数年前から植樹の神様・宮脇昭先生を招き、園内の植樹指導を受け約3万本の苗木を植えられるという緑豊かなお寺として有名でした。

更に、震災後は命を守る森の防潮堤推

進東北協議会の代表も兼務されており、お話を伺った際、「まず一緒に植樹祭に参加されることから始めましょう」というアドバイスを頂き、5月31日宮城県岩沼市で行われた国内最大級の植樹祭に参加する運びとなりました。弊社がこの協議会に加盟することを大変喜んで頂き、様々なアドバイスやお互いの理解を深める場として、会合等にも弊社の鮪屋を利用して頂きました。弊社も事前のテレビ広告等、できる範囲で協力させて頂きました。

開催に当たり、宮脇昭先生とも事前に弊社鮪屋で食事をして頂き、86歳とは思えないほどの食欲を披露して頂きました。ほとんど毎日、国内はもとより世界各国で4000万本以上の植樹をされてこられたエネルギーを感じました。最後に「アミノの森を三陸沿岸に作りましょう！」というお言葉頂き、更なる覚悟が固まりました。

そして当日、青年塾の皆様にご案内から育てて頂いた苗木も含め、5万9000本の植樹予定を大きく上回り、約7万本の苗木を植樹することができました。参加人数も5000名の予定が6000名とも7000名とも報道さ

れ、塾長のおっしゃる、「己の損得を越えろ！」という言葉通りの大成功を収めました。個人の単純な欲求だけでは大きな事は成せないと感じた瞬間でした。また、皆のことを考えて行う行動は人を惹きつけ、公益をもたらすことも実感致しました。弊社からも25名の新入社員にブックごとの植樹リーダーを担ってもらい、必須の研修として会社の看板を背負って参加してもらい、後片付けまでしっかりと終えたその笑顔にはストレスが

なく、達成感に満ち溢れていました。この岩沼での植樹祭だけでもあと15期は開催するようなので、毎年新入社員の必須研修として活用させて頂きます。本日、6月20日。弊社にとって2回目の植樹祭参加が宮城県本吉町戸倉という地域の戸倉神社で行われています。小規模ではありますが、宮脇先生もわざわざご参加されています。昨日下見に同行させて頂きました。



植樹祭当日

弊社新入社員は研修の一環として植樹リーダーに



植樹の神様、宮脇先生と事前打ち合わせ



アミノの森を
作りましょう!



すべての樹木が生き残った椿島

気仙沼近くに位置する戸倉。戸倉沿岸から船で10分の所に椿島という小さな無人島があります。震災で津波を被ったにも関わらず、全ての樹木が生きています。タブの木を中心に様々な樹木が生い茂っています。島の沿岸は多少えぐられていますが、その部分からなぜ津波に耐えられたかが理解できます。えぐられた部分には岩をも貫通する根が四方八方張り巡らされ、絡み合っています。松島と比較すると、段違いです。松島はその名の通り松が根づいている小島の総称ですが、震災の津波で多くの島から松が消えました。また多くの三陸の沿岸では、根



宮脇先生と船で椿島へ

こそぎ抜かれた松が流木となって2次災害を巻き起こしました。

この椿島は昭和41年11月7日に国の天然記念物「椿島暖地性植物群落」に指定され、島の中央部には椿島神社があり地元住民から篤く信仰されています。神社の周りだけ人的に杉が植えられ、神社を囲っています。その他は全て天然・自然

です。不思議なことに神社周りにだけ竹(笹)が生えています。宮脇先生曰く、「天然(本物)の森には偽物が入れない。人間関係や会社と同じ」。

更に、天然(本物)の森の上部は雨と太陽が下部まで届く様に決して重なり合いません。宮脇先生曰く、「これも会社と一緒に、トップが本物であれば部下は根強く育ち、トップが自ら利益を独占すれば部下は自ずと離れていく」。耳が痛くなります。人材不足で悩む原因はトップにあると指摘された感じがしました。兎にも角にも、この椿島のように植樹が出来れば東北、三陸では理想だと思います。

世のため人のために活動

今後は各地域の植樹活動に積極的に参加して行くとともに、ドングリ拾いから苗木に育てることも社員の家庭教育として取り入れ、更に植樹と水産業(漁業や鮎屋をはじめとする飲食業)の関係性を広く伝えるために、これまではセトルや求人募集のために活用していた広告媒体(地元CM、ニュース番組、天気予報、ラジオ、店内広告、自動販売機や募金箱etc...)を植樹中心に変更していきます。

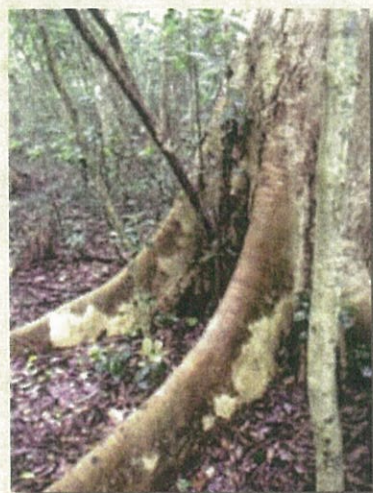


根を張り島を守るタブノキ

「木を植える鮎屋」「植樹する鮎屋」としてのイメージを確立していきます。

非営利な活動とビジネスを融合することが、古来から日本人が重んじてきた商いの本来の姿だと思いますし、世のため

人のためにならない企業は必ず衰退していきます。人口減少が深刻化していく日本において、皆様に本当に生き残ってほしいと思われる企業しか生き残っていけない時代が来ますし、歴史が証明してく



板根と呼ばれる根



重なり合わない木々

れています。

青年塾出発から、震災、社長就任を経て、皆様の教えがあつて、やっと志が出来ました。

「なまこ」を守る「うまい鮎勤」

最後に、鮎屋が木を植える理由、私の志を述べます。

木を植え、山と川を育て、そこから流れる海産物の栄養素を守り、いずれまた三陸を襲うであろう津波からも地域を守り、未来の子供達のためにもこの美しい三陸の海を守る。そして「うまい」を守るうまい鮎勤。

地域の方々にそう思われる鮎屋を目指して邁進して参ります。

